



第七十五号

会報

浄土真宗

太陽の会

「あけまして南無阿弥陀佛」

昨年、あまりめでたくなかった。昨年は疫病の続いた辛く、苦しい年ではありましたが、当会では多くのご縁を頂き、心より感謝申し上げます。会員の皆様におかれましては大変な状況の中、たくさんお参り頂き、重ねて御礼を申し上げます。



この病と人間の戦いは早いもので丸二年が経過しました。今のところ落ち着きを取り戻しつつありますが、爆発的流行である第6波がいつ来るのかという状況です。多くの皆様のご不安やご心配を抱えておられることと思います。

いつの時代も私たちは新しい知恵を身に付け苦難を乗り越え生きてまいりました。世相に流されるのは簡単ではありませんが、物事の本質は何が一番大切にするか？だと思いません。

一生は一日の積み重ねです。私たちの命は「老少不定」です。一日一日、命を紡ぐ生き方をお考え下さい。そしてこの命に感謝をしてお過ごし下さい。必ずあなたのお傍にはあなたを大事に想う仏さまがいらっしゃいます。

とはいえ、私は皆様とまだまだ沢山お話がしたいのでお身体には十分ご留意され、健やかなる新年にして頂きたいものです。

合掌
太陽の会 釋寛之

「お寺ってなに?」



「お寺は何の為に在るのか?」そう疑問を持った方がいらっしゃいました。葬儀や法事をする場所、お墓や納骨堂で死者を預かっている場所、遺産や観光の為に。どれも正解ですが、本来、お寺は、仏の教えを伝道する場所です。つまりは、生きていく私たちのための場所なのです。決して「死」のみにしか関わりません。

い暗い場所ではありません。仏さまの前で、綺麗事ではなく、本音で人生の悩みや愚痴を話せて、仏法に出逢い、自分の心を整えて頂ける場所なのです。お寺では「年間行事」として定期的な法要を開いています。コロナ禍でしばらく開催できていませんでしたが、多くの方にご参拝頂いておりました。美容エステやスポーツジムで体を磨かれる方は多いと思いますが、心はどうでしょう? 「心のエステ」の為に御寺通いをして頂くのも良いと思います。仏教は即効薬ではありません。一度聞いたから効果が出るということにもなりません。体質改善薬のように時間がかかります。繰り返し仏法を聞いて、仏さまに出逢い、本当の幸せに気付いて頂ける機会を自分から遠ざけないで頂きたいと思えます。

お寺は、生きていく私たちが仏に出逢い、心を柔らかく整える場所です。今生きているこの私の「いのち」を問う場所なのです。

「お釈迦さまのおはなし」

【幸せとは?】



ある日のこと、お釈迦さまは、気晴らしの為にカピラ城の東の門から出られました。ところが、身体の衰えた老人の姿を見て、「私もやがて、あのように老い衰えていかなければならない」と悩みを抱えてお城に戻られました。またある日、南の門から出られた時に、病気に苦しむ人の姿を見て、「私もいつか、あのように病気になるかもしれない」と悩みを抱えてお城に戻られました。またある日、西の門から出られた時に、死者を送る悲しい行列を見て、「私もやがて、あのように死んでいかなければならない」と悩みを抱えてお城に戻られました。最後に、北の門から出られた時に、1人の修行者(出家者の気高い姿を見て、お釈迦さまはこの修行者に心を惹かれ、出家の決意を強く固められました。これを「四門出遊」として伝えられています。

この「四門出遊」は、お釈迦さまが人生の根本苦である四苦(生・老・病・死)

を解決する為に出家されたという事を表しています。当時のインドでは、苦悩の解決方法として、出家という道を選ぶ人が多くいました。また、出家修行者の尊い姿に心を惹かれた為に、お釈迦さまも出家という方法を取られたのだと思われまます。人間は、どんなに恵まれた生活をしていても、生まれながらには必ず、年をとり、病気になる、そして死んでいきます。これは、どうあがいても避けられない事実なのです。この問題を解決しない限り、本当の幸せはないのです。そんな時、ヤソウダラとの間に赤ちゃんが生まれました。一説には、お釈迦さまは、「かわいい子どもが生まれました。しかし、出家の妨げができた」と、つぶやかれたことから、ラーフラ(さまたげ)と名付けられたと伝えられています。

ある夜、お釈迦さまは、お付きのチャナに命じて白馬カンタカを用意させ、密かにお城を抜け出られました。そして、二十九歳の時に出家されたのです。



合掌

「クイズ浄土真宗」

Q、仏教の教えにないものはどれ？

① 諸行無常 しよぎょうむじょう

② 諸法無我 しよほうむが

③ 靈魂不滅 れいこんふめつ



それまで誰も研究しなかった「ほんとうのこと」を見抜いて、「これが仏教だ」と、高らかにその特徴を示したのが三宝印と言われる仏教の大原則です。

「諸行無常」 しよぎょうむじょう 「諸法無我」 しよほうむが

「涅槃寂靜」 ねはんじやくじょう

がそれで、この三つの原則にそぐわない見方は仏教とは言えません。「諸行無常」とは、すべての存在はつねに時々刻々と変化しているということです。どんな

に小さくても、そして一秒も止まることなく、変化しているのです。それを展開させると「諸法無我」になります。これは、全ての存在に変化しないものとか、変化する主体となるようなものは一切ないということなんです。つまり、固定的な「我」というものはどこにもないということです。

したがって「肉体から遊離して、霊魂はあり続ける」というような「霊魂不滅」の捉え方は、仏教にはありません。もし、そのように不変なものがあるように見えたとしたら、それは執着のなせるわざと言えましょう。執着を離れて、あるがままとなった時の心の状態が「涅槃寂静」です。逆に、執着を捨て切れない私たちの有様が「一切皆苦」であり、これを加えると「四法印」となります。

Q、仏教の教えにないものはどれ？



クイズの答え・③

「歎異抄を読む」

たんにしよう



『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなった後、門弟の間に真実の信心に背く異議が生じたことから、聖人から口伝を受けた著者が、同心の行者の不審を除くために著した親鸞聖人の言語録です。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと(法然)の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

釋蓮如(『歎異抄』第二条)

「尊敬できる人に出遭えた人はしあわせです。」

親鸞聖人は、「法然上人の仰せをただ信じるだけだ」と言われている。しかしそれは、法然上人の考えを信じるという意味ではなく、自分の考えを入れず阿弥陀さまの願いをそのまま伝えてくださっている法然聖人の言葉を、信じているのである。

「浄土真宗の典籍紹介」

『教行信証』シリーズ①

正式名称を

『けんじょうしんじつぎょうしやうもんるい 顕浄土真実教行証文類』と

いいます。浄土真宗の教義が整然と示されており、通称「ほんでん 本典」とも呼ばれています。

本書は、釈尊の教説や七高僧の論釈などから、おびただしい数の引用文を整理して書きまとめられています。全六巻からなり、浄土の真実を明らかにしようとしています。

行巻の最後に、私たちに親しみのある「正信心仏偈」があります。ご存じの方も多いと思いますが、親鸞聖人が阿弥陀仏の本願に出逢えた喜びを詠まれた漢詩となっています。



「九月～十月の言葉」

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃると思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。



【九月のことば】

如来の願心が

我一人に成就したのが信心である

「安田理深」

願心に感動すれば一心というものであり、一心の中に願心全体が成就されてある。願に感動すれば、感動した一心に願全体が輝く。

願心の極まりが一心であるという事、それはひとえに他方によって信知らされたことではありませんが、禅や論書に学びつつ、真摯な哲学思想によって確かめられた。願心に耳を傾け、心を凝らして、感動に潤う生活を心掛けてゆきたい。

【十月のことば】

老いが、病いが、死が

私の生を問いかけている

「二階堂行邦」

日常の生活の中で、自分の思いどおりになるのが当たり前だと傲慢に生きている私に、老いが、病いが、死が、思い通りにならない現実となつて、「私とは何なのか、生きる喜びに出逢えたか、何をより所として、どこに向かつて生きているのか」と私の「生」を問いかけています。

【十一月のことば】

人間そのものが目覚めを

呼びかけるものが如来の本願である

「中西智海」

迷いの世界であることさえ知らず、邪見と傲慢の苦海に浮き沈みする私に向かつて自分の在り方に目覚め、如来の本願を信じ、浄土を目的としてその人生を歩め。我が名を称えよと、阿弥陀如来は「南無阿弥陀仏」という名号となり、私に真の生き方を示してください。今の私の在り方を問い、

真実の生き方を示された言葉であることは言うまでもありません。

「太陽の塔 高天原」

一部休館のお知らせ



太陽の塔 高天原では、システムメンテナンスのため、左記の日程で一部を休館させて頂きます。万全な稼働を期すために不可欠のもので、ご理解ご協力をお願い致します。

【日時】

令和4年1月28日(金) 終日

【場所】

2階自動壇(パラダイ・アムール)

納骨壇1階、樹木葬区画は平常通り

※期間中は、立入り及び参拝はできませんので何卒ご容赦ください。

「法事に ついて」

ご法事のご予約は承っております。マスク・アルコール消毒・検温実施のご協力をお願い致します。